

第2章 銃後

疎開生活

心も体も休まらぬ、集団疎開

佐藤

忠さん

さんのお話から

私は、横浜市西区南浅間町で育ちました。私は昭和九年（一九三四年）生まれですから、七歳のときに太平洋戦争に突入しました。この時は、日本は戦争に負けない、絶対に勝つのだという考えでした。そういうことを信じていましたから、大きくなったら何になるのかと聞かれたら、兵隊さんになるのだと答えていました。そういうふうで育ったのが私たちの年代なのです。

兄弟は、姉が二人で私が一番下の三人兄弟です。実は、私の下は三人死んでいます。母親の胎内で死んでしまったり、生まれてきても栄養失調や肺炎で死んだりしてしまいました。ですから、本当は六人兄弟なのです。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日は戦争が始まった日ですが、このときもハワイで多大な戦果をおさめたということで、日本が負けるという考えは全くなかったのです。翌年の二月十五日も、シンガポールが陥落して、ちようちん行列をして、日本が戦勝ムードに沸いていました。

しかし、昭和十八年ころになりますと、だんだんと戦況が日本に不利になったのですが、政府は日本が勝ったと言っており、一切、国民には本当の様子が知らされていないのです。だから、私たち子どもがそれを疑うなんてことはなかったのです。周りの大人たちもほとんど疑わなかったと思います。

昭和十八年の暮れになりますと、日本の本土は、アメリカの飛行機が飛んでくるという状態

○陥落 城や都市が攻め落とされること。

○縁故 血縁・姻戚などの縁続き。つづきあい。人と人とのかわりあい。

がしばしば出てきました。昭和十九年になりますと、戦況が一方的に不利になってきました。私が小学校四年生のとき、昭和十九年九月一日に集団疎開、学童疎開があったわけです。地方に縁故のある方は、縁故疎開と言ひまして、親戚を頼ったり、知人を頼ったりして疎開しました。子どもだけで疎開する場合もあるし、家族で疎開する場合もありました。私たち、横浜の近所に親戚縁者はいませんでしたから、学童疎開をしまして、疎開先は湯河原でした。横浜からそんなに離れていない湯河原に、小学校三年生から六年生の生徒が疎開しました。私は四年生です。そんな小さい年齢で親元を離れました。

集団疎開では、自分の体調が悪いなどということ親元に知らせることができない状況でした。私は胃腸を壊して、下痢の状態が続きました。私の場合にはホームシックがあったのだと思うのです。集団生活ができない人たちは、残留組と言ひまして、学校に残りました。親に体調が悪いから残留組に入れるようにしてほしいと手紙を書いて、自分でポストに入れました。その手紙を見て、親が「そんな弱気でどうするのだ、もっと頑張れ。」という手紙をよこしたのですが、それを先生が開封して見たのです。それからは手紙を出



イメージ図

集団疎開

○検閲 調べあらためること。特に出版物・映画などの内容を公権力が審査し、不相当と認めるときはその発表などを禁止する行為をいい、戦後の日本国憲法ではこれを禁止し。

○空襲 航空機から機関砲・爆弾・焼夷弾などで地上目標を襲撃すること。

○焼夷弾 火災を引き起こすために作られた爆弾。

す時は、先生の検閲を受けなければならないことになってしまいました。当時はそんなことは当たり前だったのです。

九月に疎開し、十一月に親の面会日が設けられました。当時、横浜から湯河原までの切符を買うのは大変です。それでも、親は無理して切符を買って来てくれました。私のやせ細った顔を見て、父親が先生にあれでは死んでしまうと抗議してくれました。そこで一旦家に帰ることになったのですが、汽車に乗った途端に私の胃炎はもう治っていました。

治ったからまた疎開先に行ったのですが、症状が悪化しました。当然、医者になんか診せてもらえません。親が来て、これではだめだということで、十二月の半ば過ぎに家に帰ることになりました。

そして、翌年の昭和二十年四月十四日の晩、横浜に空襲があり、焼け出されました。当時の日本の家は紙と木の家です。東京大空襲が三月にあったのですが、その経験から、火が類焼しないようにとどころ家をつぶしてあります。それでも、燃え出すと火は飛びますし、だめなのです。

横浜大空襲は、四月十四日の晩から十五日にかけて襲われました。また、空襲は夜にきます。B 29 が飛んできて、焼夷弾を落とすので、焼け野原にしていきまです。逃げるときの



イメージ図

火の粉などから守る防空頭巾

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

○防空頭巾 空襲などのときに飛んでくる物や落ちてくる物から頭部を保護するために頭にかぶった綿入りの頭巾。

恐怖感がひどいのです。夜は、今のよう立派な街灯などありません。山に防空壕を掘ってあるから、焼け出されたらそこに逃げなさいということになってはいるのですが、逃げる時に火の粉が飛んでくる。さつき言ったように紙と木の家でしょう。火がついたままの紙が飛んでくるのです。

もう一つ怖いのは、B29を打ち落とすために、高射機関銃と言って、火の玉のような真っ赤な鉄が飛行機に向かって撃たれるのですが、その破片が落ちてくるのです。その破片はどがついて、防空頭巾なんて全然関係なく、刺さったら死んでしまいます。これが一番怖かったです。火の粉なら払えばいいけれども、破片というのはいつどこへ落ちてくるか分からないのです。

子どもたちに伝えたいのは、戦争の悲惨さですが、なかなか伝わりません。私が言えることは、例えば、買ったものを友達に分け与えるというのは今の状況では普通にはできないと思います。これが、戦争の飢餓状態になりますと一切なくなるのです。昨日まで友達だったのが、もう友達ではないのです。食べ物奪い合いになるのです。信頼関係がなくなって、体の強い者が勝つ、丈夫なものが生き残るといいう状態になります。

今は本当にいい時代です。ただ、大学に行くのが当たり前、専門学校に行くのが当たり前といういい時代が当たり前になっていますから、幸せを享受しているという実感がないのです。今の生活を大事にしていききたいものです。

最後になりますが、戦争は絶対にしてはいけないということ

DATA

平成21年度厚別区平和事業
聴き取り
・平成21年8月26日
・厚別区役所



佐藤 忠(さとう・すなお)さん

・昭和9年(1934年)生まれ
・札幌市厚別区在住